観光学論集　15　69-76　2020

【研究ノート】

上海海洋大学における日本語教育の経緯とグローバル化に関する考察

Consideration on the History and Globalization of Japanese Language Education at Shanghai Ocean University

魏　佳寧*
Jianing WEI

要旨

2019年になった今，中国における日本語教育のブーム到来から50年あまりが経過した。その間国内情勢も大きく変化し，国民の生活水準が大幅に上昇し，国際交流が盛んに行なわれることにより中国人の視野も広がった。さらに，新しい日中関係の時代を迎えた現況下で，中国政府は言語類の『国家標準』を制定し公表した。上海海洋大学は，この新しい時代に新しい理念のもとに，どのようにグローバル化を図り，諸問題を解決していくのかを模索している。本稿は上海海洋大学における日本語教育の実践を踏まえ，100年以上の歴史を有する同大学の日本語教育が，時代に応じて教育の内容を見直してきた経緯と独特な教育特徴を明確にするものである。そして，未だ実践されていない地域との連携を取り入れた日本語教育は，現代中国の日本語教育の改善に役立つものと期待される。したがって，地域マネジメントを視野に入れた日本語教育は今後の中国における日本語教育が目指すべき方向と考えられる。

キーワード：上海海洋大学，日本語教育，グローバル化，地域マネジメント

Ⅰ　はじめに

1949年以降，中国において日本語教育は行われていたものの，国内外の情勢で大幅な伸びは見られなかった。1972年の日中国交正常化をきっかけに，中国に初めての日本語ブームが到来した。この時期に新たに日本語学科を設けた大学は16ヵ所にものぼった。次のブームは1978年の日中平和友好条約の締結によるもので，日本語学科の設立が増えた一方で，在籍学生数も約3,800人，学校以外の学習者数も１万人を越えた。日本語は英語に次いで中国の第二外国語になり，今日でもその状況に変わりはない。1990年代に入り，中国の経済発展も軌道に乗り高度成長を遂げて，日本との交流は一気に各分野に広がり，日本語人材の需要も多くなった。この状況に応じて，日本語学科を設置した学校は20世紀末までに，580か所に増加したのである。2012年に，学習者数は100万を超え，日本語教育はエリートの為の教育から大衆の為の教育に変わったと言える。

本稿は国家の需要や社会の要請，そして学生の要求の変化に応じた上海海洋大学における日本語教育の実践を踏まえ，まず，上海海洋大学の日本語教育の経緯及び独特な教育の特徴を明確にする。この目的を達成するために，『上海水産大学校史』『上海海洋大学百年誌』『新中国日语教育的历史和现实』を参考にして日本語教育における諸問題を分析し，それに対応する教育政策を解明し，今後の教育現場に導入することを目的とする。また，中国では未だ推進され

*上海海洋大学外国語学院日本語学部

ていない「地域マネジメント」を視野に入れた日本語教育を実践し，独創性に富んだ新たな日本語教育の確立への道筋の提示を目指すものである。

Ⅱ　中国における日本語教育の経緯

1．国内外情勢の変動

改革開放後，中国の経済は前例のない速度で成長・発展し，国内総生産は1978年の3,679億元から2017年の82兆7,122億元に達し，33.5倍にもなった。2017年の国民所得は平均59,660元になり，人々の生活は豊かに，そして生活の質も大幅に高まったのである。所得の増加は生活の改善だけでなく，一人っ子政策とも相俟って，子どもの教育に惜しみなく投資され，子どもの将来に大きな希望を託すようになった。先進国である日本も中国人の視野に入り，日本語の学習を希望する人が増えていったのである。

しかし，日本語教育には，円滑且つスムーズな日中関係が欠かせない。日中関係も両国の国交正常化以来，友好と交流を重視した故に，何度も日本語ブームが起きてきたが，徐々に両国の関係は経済面に偏りが見られるようになり，政治面においては，歴史問題と領土問題についての認識の違いにより，完全に冷めた時期が訪れ，「政冷経熱」という奇妙な局面になってしまった。本稿の執筆の時点で，このような状況はすでに改善に向かい，日中の連携や協力の機会も今後さらに増加すると予測される。

2．言語教育に関する国家方針の登場

中国が全角度全方位の改革開放を行ってきた背景には，「外国の文献が読める」ことのみに重きを置いた「過去の言語指導の方針はすでに時代遅れとなり，一刻も早く修正をしなければならない」という状況があった。そのため，新しい時代に備えて，2018年に中国政府は「外国言語文学類教育質量国家標準」を制定し公表したのである。これは今後の言語教育の道を導く働きを背負っているもので，当然ながら日本語教育に関わる「言語標準」もその中に含まれている。

こうして，中国における日本語教育のブーム到来から50年あまりが過ぎた2019年になった今，生活水準が大幅に上昇し，中国人の視野も広がったことにより教育に対する期待も変わってきた。地域と連携する地域マネジメントの実施や，ようやく新しい関係を築ける時代を迎えた日中関係におけるグローバル化に対する課題も増加した。上海海洋大学は，この新しい時代の新しい理念のもとで，如何にグローバル化を図り，諸問題を解決していくのかを模索している。

Ⅲ　上海海洋大学の日本語教育

1．上海海洋大学における日本語教育の経緯

2019年は上海海洋大学設立から107周年にあたる。100年以上の歴史を有する上海海洋大学の変遷について，その概略を示したい。

上海海洋大学は，1912年に江蘇省立水産学校として開校し，1937年～1947年の間は戦争で学校全体の営みが中断し（部分的に他の学校と合併，別の校名で運営を続けたがいずれも長くは続かなかった），1947年に上海市呉淞水産専科学校として再開したのち，1951年に上海水産専科学校に改名された。1952年には上海水産学院に昇格し，1972年にアモイに移転してからはアモイ水産学院に改名された。1979年に上海に戻るとともに，学院の名は上海水産学院に戻され，1985年には上海水産大学に昇格し，さらに2008年に現在の上海海洋大学となった。このような改名の度に，学校の規模や影響力が大きくなっていった。

中国における日本語教育の発展は，日中国交正常化を境にしていくつかの段階に分かれるが，上海海洋大学は独自の歴史を有

しているため，日本語教育の発展は大学の設立まで遡ることが出来る。以下は上海海洋大学における日本語教育の歴史の概略である。

⑴　上海海洋大学設立初期における日本語教育の需要と役割（1912年～1945年）

前述の如く，上海海洋大学は1912年に設立された江蘇省立水産学校をその起源としているが，そのきっかけは，1903年に清末の状元で翰林院に勤めていた張謇（清末民初の政治家・実業家・教育家）が日本を訪問したことにある。張謇は２か月半をかけて，長崎から北海道までの学校や会社などを視察した。特に学校については，20か所以上も訪問している。日本の漁業及び水産教育に大きな衝撃を受け，漁業会社や水産，商船の学校を創立すべきであることを朝廷（清の政府）に奏した。当時学校を設立した目的は，西洋各国に分裂させられた中国の水産業と航海業を発展させるためであった。

初代校長は日本東京水産講習所を卒業した張鏐という人物である。張鏐は1912年12月に初期の予科生68人を募集し，日本の教育体制に倣い漁労と製造の二学科を設定した。この時期の日本語教育について，上海海洋大学に関する文献は少ないが，『上海海洋大学百年誌』に所収された『大事記』[1] 民国６年（1917年）の項に，以下の記載を確認することができる。

10月（中略），然后由船务员张景葆，技术员王传义率领赴日本山口县，岛根县进行渔业调查，11月回校。

11月（中略），张希达，沙玉嘉自日本学成回校。

12月，张楚青，陈廷煦自日本见习回校。

また，民国７年（1918年）の項には以下の記述がある。

是年，侯朝海等一批毕业生赴日留学。（後略）

（訳：1917年10月に，学生が船員張景葆，技術員王伝義に引率され，日本の山口県と島根県に漁業調査に行き，11月に学校に戻った。1917年11月に日本に留学させた二人の学生が帰国した。1917年12月に日本で調査を行った二人の学生が帰国した。1918年に卒業生が日本に留学した。）

以上の記述から，少なくとも1918年までは日本との交流が行われていたことが理解できる。学生のみならず，教師側にも日本との交流があったことも記されている。

1912年～1921年の間に日本語教育が行われた記述はないが，上海海洋大学は日本側との交流があったことから，一定規模の日本語教育は行われていたものと推測できる。江蘇省立水産学校の設立は，日本の先進の漁業技術に関する教育や交流を目的とするものであり，その役割を大いに果たしたものであった。1921年頃になると日中関係は悪化し，学校の移転や名称が変更されるなどの状況の中で，日本語の授業を続けた学部が若干あったという記録がわずかながら残っている。

⑵　日中関係と日本語教育（1945年～1990年）

戦後の中華民国時代において上海海洋大学は，1947年に上海市呉淞水産専科学校として再開した以外に日本語教育に関しては，依然として停滞したままであった。

1949年に中華人民共和国が設立され，1951年に校名は呉淞水産専科学校から上海水産専科学校に変わった。1952年には，ソ連の大学の制度を模範として，本格的な大学生向けの新しいカリキュラムが作成された。しかし，カリキュラムを実践する過程において問題が相次ぎ，1953年に再度カリキュラムの改正がなされた。当時は外国語を専門とする大学でなければ，外国語教育は基礎授業として扱われるのが普通であった。それ故，上海海洋大学も建国当時の外

国語教育は，ロシア語が主であった。しかし，国の情勢変化につれてロシア語を第一外国語，英語を第二外国語とし，英語教育も始まったのである。

建国から10年以上経った1960年には，中国と日本の対立関係は徐々に和らぎ，人員の交流と科学技術資料の輸入も増えた。上海海洋大学は水産を専門とする学校であるため水産に関する資料が増加し，中でも海水養殖と水産品加工に関する日本語資料がとりわけ多く輸入された。このような状況に応じて1962年には，日本語も英語と同様に第二外国語として設定された。資料の解読のため，最初の学習者は，学生でなく若い教師と若い技術員であったが，間もなく学生向けの授業が始まった。第一外国語は依然としてロシア語であったために，第二外国語は英語か日本語のどちらかを選択しなければならなかった。

以上の経緯から日本語が選択科目として始まったのである。上海海洋大学は，上海市で最も早く日本語を公共選択科目として開講した学校となった。そして，1964年～1979年には，水産養殖学科と水産加工学科に公共日本語必修科目が設置された。その背景には，1972年の日中国交正常化に伴い日中関係が回復に向かい，交流が再開されたことがあった。

⑶　中国における日本語ブームの拡大と上海海洋大学における日本語教育の発展（1990年代）

90年代に入り，改革開放路線をさらに推進した中国は経済発展の重要性を示すために，上海や深圳を「改革开放试验田（改革開放の実験地区）」とし，外国の投資を積極的に受け入れ，さらに，外資系の企業に有利な政策を打ち出して便宜を図り，各国から有名な大型企業を招致することに努力してきた。

その一方で，日本の企業はバブル経済崩壊の影響を受け，コスト削減のために，海外進出を盛んに行ない，中でも，日本に一番近く，人件費のコストも日本よりはるかに安い中国は極めて魅力的であったことから，日本の各企業は最優先に中国を選び，中国に会社を設立し，工場を建設したのである。

また，日本企業の海外進出の背景には，日本政府が積極的に日本語の国際化を推進する動きがあり，日本語の教育面において，中国は日本語教師の研修をはじめ，書類，資金など膨大な援助を受けたのである。その結果，上海では過去における二つのブームと比較にならない規模と持続期間を持つ新たな日本語ブームが始まった。上海の大学では，相次いで日本語に関連する学部を設置し，その波紋は沿岸地区から内陸地区まで広がっていった。

日本語を勉強すれば高所得の日本企業に入れるという希望のもと，日本語を勉強したいという学習者は増加し，三回目の日本語ブームは速いスピードで拡大したのである。このブームの影響を受け，まだ総合大学ではなかった上海海洋大学（当時の上海水産大学）は，日本企業に就職できる人材育成のために，1993年に２年間を上限とする短期「ビジネス貿易日本語学科」を設置した。ビジネス貿易を中心としたものの，日本語を専攻する学生を募集し始めたのである。上海海洋大学における日本語教育は公共必修科目から専攻学科に変わり，新時代に入ったと言える。学科教育に備え，精読，読解，聴解などの課程を設け，さらに会社経験や金融貿易の経歴がある教師を募集し，ビジネス貿易日本語の教育を始めた。２年後の1995年には，短期「ビジネス貿易日本語学科」は「日本語学科」に改名され，重点は日本語教育に移転し，それに応じて，新しいカリキュラムやシラバスも作成された。上海海洋大学は日本語学科の設立に力を入れ，さらに，日本企業そして学生の希

望に応え，1998年に日本語学科の学習期間を２年から３年に延長した。90年代は多くの学校で日本語学科発展の飛躍期であったものの，総合実力がまだ弱い上海海洋大学の日本語教育は専攻学科の入門段階で，教育に関するすべてが模索段階で，しかも未熟であった。しかし，この時期，上海海洋大学の日本語教育は徐々に補助的な立場から独立し，「無」の状態から「有」になり，その後の日本語教育の発展に対してのよい基礎を築いたのである。

⑷　2000年以降の上海海洋大学における日本語教育の状況

2000年～2019年の20年間における上海海洋大学の日本語教育は，大きく二つの時期に分けられる。第一の時期は2010年までの11年間である。この11年間は中国全国で日本語教育の黄金期であり，上海海洋大学の日本語教育の飛躍的な発展期でもあった。第二の時期は，2010年以後から現在までで，この時期は日本語教育の停滞期であり，転換期でもある。

2000年の上海は改革開放の先行者として，経済面においておおいに成果を遂げた。90年代に中国に移転してきた日本企業も利益をあげ，それに魅かれて，さらに大量の日本企業が入り込み，上海だけでなく，周辺の江蘇省や浙江省にも工場を設立していった。それ故，日本語のできる人材の求人は倍増し，この情勢に乗り，同じく2000年には，日本語学科は４年制になり，日本語学位を授与できる学生を本格的に募集するようになった。募集規模が年々増大し，2005年には日本語学部が成立され，2006年には英語学部，大学英語研究室と合わせて外国語学院が開設された。このように2010年までは上海海洋大学の日本語教育は大きな発展を実現した。

①学科生人数

表１は，上海海洋大学における日本語学科生人数の推移を示す。

2000年から2003年まで，毎年学科生人数が大幅に増えているが，これは上海海洋大学における日本語教育の上昇期を意味している。2003年から2005年までは，学科生人数が横這いになっており，同大学における日本語教育の安定期を示している。2006年にはそのピークに達したが，2008年と2009年になると学科生人数が減少し，2010年には安定期の水準に戻ったことが分かる。

2008年に同大学は，大学のより良い発展を図り臨港新エリアに建築された新キャンパスに移転したが，これが要因となり2008年と2009年の募集規模はやや控えられた。

②教師構成

日本語学科の教師の講成はその時々の必要に応じて調整している。90年代，ビジネス貿易に向けて，企業経験のある教師を招聘し，３年制の日本語学科に備え，学士卒業の教師を募集した。2000年から2005年までは大学院を卒業した教師を採用し，10人程度で日本語教育を行っていた。急増する学生に対する人手不足が原因で，教師募集は急務になった。高いレベルの学科建設や国の方針などの理由で，2005年以降は博士を有する教師を募集するようになった。特に日本に留学経験がある博士取得者が望まれた。教師の専門分野から見れば，主に言語学，文化学，社会学などに限っていた。

本場の日本語が重要であるとの声が上がり，2005年以降に日本人教師の招聘が開始

表１　上海海洋大学における日本語学科生人数の推移（2000年～2010年）

年間（年）	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010
募集人数（人）	49	77	96	123	125	122	136	135	118	78	126

資料：『上海海洋大学百年誌』より筆者作成

された。

③コースと科目

日本語学科において，日本語の授業はその基幹であった。三年生になると，大きく言語と文学文化の二コースに分けられる。日本語教師が担当した科目としては，日本語精読，日本語読解，日本語聴解，日本語会話，高度日本語，日本語視聴説などが必修科目で，日本概論，日本史，日本文学史，日本文学，科学技術日本語などが選択科目であった。

2010年以降の中国は，グローバル化を加速的に推進している。日中政府間の交流が少なくなった代わりに，民間交流が盛んに行われてきた。上海海洋大学は国内外の情勢に応じて，教育の規模を縮小し，カリキュラムやシラバスを再編成し，特に日本の大学との交流に力を入れてきた。公費交換留学生制度，短期留学，遊学，実習など様々な手段を取り入れ，教育の質を改善し，海外留学の経歴がある人材を招聘している。伝統的な言語コース，文学・文化コースからビジネスコース，翻訳コースに変更され，日本語学部も大学院生を募集できるまでになった。日本語教育の重点は日本文化・教育・ビジネスなど先進的な知識を習うことから，日本の各知識を学びながら，中国文化・中国政治・経済を紹介することに変わった。今後の日本語教育の方針は育った人材が日中交流に大いに役目を果たすことが期待され，この目的のために，日本語教育に多くの試みがなされ，より良い方策を見つけるよう努力している。

2．日本語教育における課題

上海海洋大学における日本語教育の歴史は長いが，組織的になったのは90年代以降のことである。組織の規模が急速に拡大された一方で，日本語教育の質が問われはじめたのである。如何にグローバル化としての役割を果たすのか，まず日本語教育における課題やニーズを解明することとする。現状における課題は以下のとおりである。

⑴　教　師

教師の構成は，教授２人（内：定年後再雇用１人），副教授６人，講師９人である。学歴は博士９人，修士８人（内：定年後再雇用１人）で，その専門分野は言語学４人，文学３人，文化学その他10人（内：定年後再雇用１人）である。年齢は60代１人（定年後再雇用），50代３人，40代10人，30代３人で，そのうち男性は全員50代で，残りは全て女性である。

以上の統計から分かることは①教授が少ないこと，②修士の学位しかない教師が多い。③専門が経済や翻訳の教師がほとんどいない，④年齢的なバランスが悪い，⑤男性教師の募集が難しいことである。以上の問題を解決するために，上海海洋大学の日本語教師は自分の実力を高めるべきであるものの，年間6,800時間の授業を担当している現実は，能力を高める余裕がない状況である。

⑵　学　生

豊かになった中国の家庭は一人っ子政策の影響で，子どもに対する教育を重視する一方，大学の専攻を選択する時は，就職よりも趣味を優先する傾向が強い。「何故日本語を勉強したいのか」との問いに対して，半分以上の学生は日本のアニメーションが好きだからと回答し，残りは日本文化が好きで，日本に留学を希望しているからという回答である。

つまり，日本語を学ぶ学生の学習目的は不明瞭であり，アニメが好きだからと答えた学生は，三年生になる頃には勉学に対する意欲が減少する傾向にある。

⑶　コースの授業内容

新しい時代に応じて，伝統的なコースを

やめ，新しいコースを設けたものの，教育指導方針が不明瞭で，シラバスやカリキュラムが混乱し，コースの授業内容は新時代に遅れている。コースに適合するよい教材がなく，教師自身の知識が乏しく，実践経験も少ない。コースに応じて開設した主要科目は選択科目にすぎず，クラスの人数が多いうえに，週のコマ数が少なく，卒業までに学生が身につける知識や能力は低いのが現状である。

3．今後の日本語教育の課題

上海海洋大学は日本語教育における各問題を解決するために，様々な試みに挑戦してきたが，その中でも次の課題に関しては，積極的に解決策を考え，取り組む必要がある。

⑴　授業内容の改善と教師能力の養成

社会の進歩により，新しい科学技術がどんどん発明され，その新しい技術を利用することで，教育効果が増大する可能性がある。翻訳・通訳コースとビジネスコースにおいて，理論に関する授業を減らし，その代りに実践的内容の授業を増加させることは今後の進むべき方向性である。

教師の能力は教育の質に直接大きく影響するため，教師の能力養成は学校研修と企業見学の両方面から行うべきである。学校研修は国内外のいずれでもいいが，教師の理論能力と学術能力を養成する効果がある。一方で，企業見学は教師の実践経験を養う良い手段である。研究機構と企業の連携は教師能力養成のためだけでなく，学生の就職などにも役立てることができる。

⑵　地域マネジメント

地域マネジメントという理念は昨今の日本において，各分野で盛んに行われているが，中国ではまだ地域との連携はまだそれほど重視されていない。上海海洋大学の日本語教育は現段階では学校内の教育に限られ，地域の需要には貢献できていない。しかし，地域マネジメントの理念は地域各分野の優勢を統合し，最高の効果を収得できる手段であるため，今後の中国で受け入れられると確信している。正に上海海洋大学が位置している臨港エリアは高度貿易自由化の上海「新エリア」として設定され，これからこのエリアで行われる世界規模の会議やイベントが増大し，外国語の使用頻度も上がることは言うまでもない。

このようなことからも，上海海洋大学の日本語教育が翻訳や通訳の実践基地として確立できれば，地域との連携の第一歩になると考えられる。さらに，社会人向けの日本語コースもセッティングし，日本語教育を校外に拡大することも必要である。これらをきっかけにして，地域との連携が広がり，日本語教育の真の価値を引き出し，日本語教育をもう一度見直す絶好の時期が到来したと言える。

Ⅲ　おわりに

本稿は，100年の歴史を有する上海海洋大学における日本語教育の経緯を紹介した。そして，同大学と日本との交流が今もなお継続している理由から，同大学の日本語教育は学校の需要に応じ主学科を支えながら，時代の流れに従って国家の需要や社会の要請，そして学生の要求に応えながら，同大学独自の教育を実践してきたことにあることを示した。また，日本語教育における諸課題やニーズを分析し，教員能力の向上の必要性，学生の学習目的が不明瞭な場合があること，授業内容のさらなる改善が求められていることを示した。さらに，未だ中国では推進されていない「地域マネジメント」を視野に入れた日本語教育を実践し，独創性に富んだ新たな日本語教育を確立することを示したが，これは今後の中国にお

ける日本語教育の一つの方向になるものと確信している。

世界の教育機関ではグローバル化を推進している。このような情勢で，国家の需要，社会の要請，学生の要求に対応し，どのように日本語学部の一層の進歩を推進するのかを考えなければならない。現代社会における日中関係の中で，上海海洋大学日本語学部は今後「やれること・やるべきこと」が沢山あると言える。

日本語教育を行う中国の各大学は，その発展の道では差があるものの，抱えた問題には共通性があると考えられることから，上海海洋大学の事例は，日本語教育の分野において参考になることを期待するものである。

注

1）『大事記』は上海海洋大学百年誌編集委員会（2012）編纂による『上海海洋大学百年誌』（上海人民出版社）に掲載されている。

参考文献

上海水産大学校史編集委員会（2002）:『上海水産大学校史』上海人民出版社。

上海海洋大学百年誌編集委員会（2012）:『上海海洋大学百年誌』上海人民出版社。

程　志燕（2016）:『新中国日语教育的历史和现实』『理论与现代化』5号，123-128頁。